

## コラム

## 握手で迎える兼寛校長

高木兼寛が慈恵の学生にもとめたのは、人間味のある、病人の気持ちのわかる医師に育つことであった。それには先ず学生のうちから品性ある物腰（身のこなし、ことばつき）と服装をしていなければならなかった。

兼寛校長は朝7時になると、もう学校の校門に立っていた。そして登校してくる学生の一人ひとりと握手をするのである（だから遅刻でもしたら大変であった）。校門で彼は学生の物腰、服装を一人ひとり検閲するのである。挨拶の仕方から、帽子のかぶり具合、洋服・和服の着方まで合格したときにはじめて校舎に上がるのを許されるのであった。

当時の学生の一人、永山武美（明治41年卒業）は校門での出来事をこのように回想している。「ある朝私が登校してくると、校門に立っておられた校長がいきなり英語で『Good morning. It's fine today（お早う、いい天気だね）』と言われた。私が『Yes』と答えると、『Yesとは何だ。無愛想な！ Yes, indeed（本当ですね）ぐらい言え！』と叱られました。私はいま80歳になりますが、今でもこの『indeed』というのが私の頭から離れないのであります。教育とはこのようでなければならぬと思うのです」と。（永山武美といえばまだ知る同窓も多いと思うが、兼寛校長の薫陶を受けた生粋の慈恵人であり、若くして欧米に留学して教授に就任し、晩年には戦後のもっとも困難な時期の学長として本学の復興に大きく貢献した人である）

服装については、そのみだれは品性のみだれであるということ

で、とくに校長の点検は厳しかった。ある学生の記録によるとこんな風であったという。「服装がみだれていると校長はすぐにその場で直されます。当時は和服ではかまをはいている学生も多かったのですが、みんなの前で裸にされ、本当のふんどしはこういう具合にやるんだ、ふんどしは三尺よりも六尺の方がよろしい、など言いながら侍のやり方で締めなおされるのです。きまりが悪いなんて言っちゃいられませんでした。はかまのはき方も、先生はフロックコートか何か立派な洋服を着ておられたのですが、それが汚れるのもかまわず、砂利の上にひざまずいて、口で説明しながらはかまをはかせるのです。へこ帯はどのように結ばなければいかん、はかまの紐は十字に結ばなければいかんなどと言いながら、事務員と二人で引っ張るのです」と、校長と学生の関係がしのばれて、微笑ましい光景である。

また喫煙は、風紀のみだれであり健康のためにも良くないというので、とくに厳しく禁じられていた。校長に見つかればそれこそ大目玉をくらうのが必定であった。ある日こっそり喫煙していた学生が校長にみつき、しかもびっくりした彼はとっさに逃げてしまった。太鼓腹の老校長はそれを懸命に追うのだが、二人の距離はひらくばかりであった。ところが学生がトイレに逃げ込んだのをたしかめた校長は、急いで事務員に椅子を持ってこさせて、トイレの前にどっかと座り込んだのである。閉じこめられた学生はこれにはたまらず、ついに降参してそのまま御用になったのであった（まさに文字通りの“雪隠詰め”であった）。校長室で大目玉をくらったのは言うまでもない。

校長と学生の関係といえば、普通はなんとなく無用な鋭さをもちがちであるが、これらの話には不思議とそれがみられない。おそらくそれは兼寛にさまざまな意味での学生にたいする愛情があった

からではないだろうか。またどの話にも感ずるのだが、兼寛の言動には何か凜（りん）としたおかしみがある。そしてそのおかしみのもととはといえば、これまた学生への愛情の深さからきているように思われる。それがなければ、第三者にとって愛（いと）しさとしてのおかしみは感じにくいものだからである。